南太平洋に桜散る―
幻の叔父・山岸昌司を追って
第二章

乙飛六期　故　山岸昌司　様
姪　平林　峰子

朝五時三十二分信濃大町始発の電車に乗り松本駅で特急に乗り換えると茨城県友部駅に着くのは午前十一時三十六分。
私が筑波海軍航空隊跡を訪ねる時のいつもの道程である。
あの時代、昭和十六年十一月これが最後と故郷に帰り、のちに筑波海軍航空隊へと戻る車中での叔父山岸昌司の気持ちはどんなだっただろうか・・・・。
村の人が書いたものだろうか、寄せ書きされた日章旗が壁に貼られ、その前で私の姉久子、（一歳）を抱っこしてコタツに入っている叔父の写真が遺されている。その時の様子を、叔父は日記に次のようにしたためている。
「夕方より慰労休暇。二十二日家に帰って『久子の元気なのが何よりうれしかった。』〇六時起床、姉さんの心づくしの御馳走に舌鼓を打ち、先祖の皆様、父さま、母さまの墓に参りつつ、〇七三〇家を発つ。まだ、暮に一ヶ月もある事で客も少なく割合楽な旅を過ごすことが出来た。友部に着いたのが二三三〇頃」

平成二十六年四月七日、私自身では二回目となる靖国神社の慰霊祭に参加する。千葉に住む姉久子と妹真由美の三人で大鳥居をくぐった。雄飛会の皆様と神前に伺う。玉串を奉奠し母の分までそっと手を合わせた。母もどんなにかこの場所に来たかっただろうと思うと切なくなった。
そして、五月十八日、筑波海軍航空隊の慰霊祭に出席する。慰霊碑の前での式典が終わり、ふと碑の後ろを見ると、この場所を提供して下さった家の方が畑の土手に紫色のあやめの花をきれいに植えてくださっていた。あやめは、五月の男の子の節句の時に飾る花。この筑波から飛び立ち戦死された多くの若者達の霊をなぐさめようと植えてくださったのだとやさしい心遣いを感じた。慰霊碑から少し離れた記念館に移動しての直会の席で「講話」をとの依頼があり、私が初めて友部の町を訪れた目的は、友部駅前にある永井一郎衛門さんの家を訪ねるためだったことや、先代の永井さんと筑波海軍航空隊教員時代の叔父とのかかわりを皆さんの前で語った。話が終わり少しすると私に声をかけて下さった一人の男性がいた。歴史研究家の吉野泰貴さんというこの方はその後私にとってとても大切な方となった。吉野さんは、五月二十五日、土浦で行われる豫科練慰霊祭にも出席されるとの事で再会を約束しておわかれした。
五月二十四日、上野駅で長野県小川村から来られた西澤廣義さんのご遺族の皆さん、そしてニューギニア会の会員で同じ小川村に住む大日方辰夫さん（大日方さんのお父さんは昭和十八年九月三日三人の子供を残して激戦地となった同戦線へ送られ戦死されました。昭和二十一年の初め真っ黒な親指だけが、戦友の手で遺骨として届けられたそうです。大日方さんは慰霊や遺骨収集で何度もニューギニア島を訪れています。）そして私と同じ大町に住む甲飛十期で昭和十九年六月十五日硫黄島で戦死された神社明さんの甥、神社正幸さん、それと私の妹と待ち合わせ土浦に向かう。
一時間ほどで列車は土浦駅に着いた。駅には海原会理事の平野陽一郎さんと参与の行方滋子さんが出迎えてくださった。車で土浦駅の近くにある昔豫科練の人達がよく通ったという「ほたて食堂」に行き、てんぷら定食をいただいた。当時の若者たちが通ったこの食堂はふるさとの母の味を食させてくれた唯一の楽しみの場所だったという。
その後は一路笠間市友部にある筑波海軍航空隊記念館に向かう。一週間前にも訪れたばかりのここは平成二十五年十二月二十日に海軍航空隊の本部庁舎を利用する形でオープンした施設であり、映画「永遠のゼロ」のロケ地ともなった所である。叔父の日記帳・弓・双眼鏡が展示され

ている。二階に登る階段は御影石で重厚感があり東日本大震災の時にもびくともしなかったという。何故だろうか？
ふと、二階からこの階段を下りてきて叔父が「どうした？」と声をかけてくれたような気がした。三十分位見学しただろうか、土浦に戻り夜になると堺理事長も参加されて皆さんで夕食をいただいた。堺理事長をはじめ明日慰霊祭に出席する方々と食事ができたのも不思議な気がした。翌日は天気も良く汗ばむ位の陽気で、時々吹く霞ヶ浦からの風が心地良い、第四十七回豫科練慰霊祭の当日である。
式典が始まると、白い制服が眩しい九人の海上自衛隊の隊員が戦没予科練生を偲んで弔銃を行った。この光景は昨年度の慰霊祭の時も同じだったが、何度見ても十五才の叔父の姿が目に浮かび涙が流れた。多分ほかの遺族の人達も同じ気持ちだったと思う。そして、遺族代表、西澤廣義さんの甥である西澤政充さんのご挨拶の言葉が心に残りました。「いずれ私もあちらへ行き叔父に面会することになる訳ですが、その時に叔父達がその命と引き換えに守り抜いた日本の今を、はたして私は叔父に誇らしげに話す事が出来るのでしょうか。」と、私も同じ気持ちになりました。
式典が終わり雄翔館の見学をしていたら、一週間前に筑波海軍航空隊記念館でお会いした吉野さんと再会する。そして一緒にいた奈良のＡさんとういう女性を紹介された。Ａさんは、女性ながら熱心な「海軍航空隊」の研究家でその後私にとっては吉野さんと同様大事な大切な人となっていく。この偶然の出会いが思いもよらぬ方向にタイムスリップしたのです。「私は特に乙飛九期生の事を調べているのですが、山岸さんと一緒の飛行機に乗っていた電信員の人は、同じ長野県の岡谷市出身の乙飛九期生村上守司さんという方ですよ。」と言われ私は「えーっ」と言っただけであとは言葉が出ませんでした。慰霊祭の後家に帰った私はどうしても気になってＡさんへ手紙を書きました。
すると、折り返し「もともと戦記物が好きで中でも台南航空隊に関心がありました。台南空には小川村の西澤廣義さんが在籍していました。また飛練を卒業したばかりの九期生が大勢配属されており遺族の方からお借りしたアルバムと同期会誌の影響もあり次第に九期生に夢中になってしまいました。全員の顔と名前を一致させたいのですが、まだ半分に届かないくらいです。山岸さんのペアの村上守司さんも翔鶴で同僚だった萩谷幾久男さんのお顔もまだ把握できていません。」とのお手紙が届いたのです。この時は二人とも、のちに萩谷さんの遺族の方とお会いできる事、そして萩谷さんのお墓詣りをする事が出来る事など考えてもいなかったと思います。そして、手紙には山岸さんの事は、土浦の慰霊祭の前、筑波記念館に展示されている写真を見るまで全く認識しておらず写真を見た時も下宿の御主人に可愛がられていたんだなあと思いながら見ただけで、村上守司さんと結びつけていませんでした。
吉野さんから「乙飛六期の山岸さんのご遺族とお会いした。」という話を聞き改めてあの写真の山岸さんが村上さんのペアの操縦員だったことに気が付き驚きました。「豫科練外史」に書かれている萩谷さんの回想、駆逐艦に突っ込んだ「村上の機」の場面は何度も何度も読みました。艦攻は三人乗りでペアと言うのは一蓮托生というか生きるも死ぬも一緒、おそらくペアを組んだ時は機長で操縦員である山岸さんは「こいつらは絶対に無駄死にさせない」と思ったはずですし同郷であり豫科練の後輩でもある村上さんは「すべて機長に任せる。」というつもりでいたのではないかと思います。「そういう存在です。」と続けて書かれてありました。さらに「吉野さんから、山岸さんの事を聞いた時も村上さんを通して懐かしい人に巡り会えたような気持ちになりました。山岸さんは村上さんのペアの操縦員というだけではなく九期生とは他にも縁があるかもしれません。九期生の中に山岸さんから操縦を教わった

人がいるんじゃないかと思います。(後日Ａさんの予想どおり叔父と乙飛九期生の皆さんとの強いつながりが判明します。)そんな山岸さんの姪御さんにお目に掛かれたこと大変嬉しく思います。」とお手紙を頂きました。それからＡさんと何度も手紙やメールでのやりとりをしていく中で、叔父の日記から今でも信じられないことが分かったのです。

以下は昭和十六年三月十六日の叔父の日記の記述です。「小船井写真館に行く。日当たりのいい縁先で爺さん（失礼）と写真帖の話をしていると今年十二になる篤君が仲間に入る。人なっこい大人しい可愛い子供だ。爺さんが用を得て立って行く。篤君と二人になる。そして二人は千年の知己の様になつかしい面持ちであれこれと話あった。(純心な可愛い子供とあれこれ考えながら子供の心をそこなわないように語り合うのがなによりも楽しくそして嬉しい。)」この日記を見たＡさんからまたまた「篤君って阿見坂の途中にあった小船井写真館の長男の少年では？『昨年お会いしてます。』と手紙が届いた。「当時この写真館に通われた方にはなつかしい小船井写真館です。そこには蓄音器が置いてあり憩いの場所であり毎日たくさんの人が訪れ写真を写されていたと篤君からお聞きしました。ふるさとに送る写真を写されていたのだと思います。後日篤君とお会いすることができました。日記には篤君とありますが本当のお名前は篤夫さんといいます。」

十月四日、土浦でお会いし「山岸昌司の事覚えていますか？」と訊ねると「もしかしたら逆立ちの上手な人だったかなあ・・・・」と言われ「当時十二歳の少年が毎日目にする兵隊さんの顔を七十年過ぎて覚えているはずないですよね！」と私が言ったら何だか懐かしそうに笑ってうなずいた。篤夫さんは八十二歳で今でもお元気です。それから「是非来年は予科練の慰霊祭に出席して下さい。」と私が言うと「来年も元気でいたらね！」と約束してくださりお別れしました。

叔父の足跡を調べている中で正直出口の見えない時もありました。でも何かに導かれるようにいろいろな所でいろいろな人と巡り逢ってお話を聞くことができそして教えて頂きました。しかし、私の旅はこれで終わりではなく、まだまだ続いて行くのです。